

## 書 評 と 紹 介

細井 勇著

### 『石井十次と岡山孤児院』

——近代日本と慈善事業』

評者：田澤 薫

大著である。改めて指摘するまでもないが、「石井十次と岡山孤児院」の主題は、関連研究や著作も少なくなく語りつくされたかに見える。その主題になお取り組んだ本書が、意義ある内容を得て研究書として成功した背後には、著者が、研究班の一員として1991年に始まる石井十次資料館所蔵資料の整理と目録化を担い、これらの資料の全容を把握し十全に活用し得る立場にあったことが大きく影響していると思われる。質の高い実証研究を可能にするだけの豊富な第一次資料を駆使して、「実証主義的態度は、あくまで前提であって、一定の価値志向性において、過去の中に現在を、現在の中に過去を読み取っていく」（本文より）歴史研究を試みたことが、本書の存在意義であろう。

「あとがき」に明らかにされているように、著者らは地域での「石井十次セミナー」の開催、『石井十次資料館研究紀要』の発行等、広がりのある研究活動を行っている。先人の思想と社会事業実践に学ぼうとする研究姿勢が、こうした展開に具体化されており、その流れのひとつの収斂として本書が形を成していることに、ま

ずは感銘を覚えずにはいられない。

いま「先人の思想」という表現を用いたが、本書における著者の価値志向性の一つの例に、「思想」ではなく「エートス」という語が採用されている点が挙げられる。（本書中、「思想（=エートス）」とある箇所が見られるが、思想とエートスは一般的に同義ではないし、著者も他所では異なる意味合いで使っている。）本書の研究視点の一つにも、石井十次のエートスの問題が指摘されている。石井研究において、殊に「エートス」を重視する視点は、何を意味しているのだろうか。エートス（ethos）は、「①人間の持続的な性格の面を意味する語。②ある民族や社会集団にゆきわたっている道徳的な慣習・雰囲気」（広辞苑第4版）と定義され、パトスの対義語とされる。著者がこのギリシア語を用いた意図は、石井の内面性が思想と呼ぶほど意識的に形成されたものではなく、体系的なまとまりの体をなさず、論理的説明になじまず本能的である、という意味なのか。徳富蘇峰との関係などで思想に「変節」が見られると指摘されることのある石井について、著者は第11章で「石井の思想変容」と捉える立場をとっているが、石井の内面性がエートスである限り意図を契機とする「変節」とは自ずと無縁である、という理解も成り立とう。

エートスを手がかりに石井の活動や実践を読み解こうとする際に、著者は、岡山医学校在学中の石井が医書を焼き捨てて孤児教育への専心を誓うエピソードを取り上げて、世俗的価値の否定と見る従来の読み取り（柴田善守『石井十次の生涯と思想』など）を超えた理解を試みている。すなわち、著者は、キリスト教と伝統的実業教育の価値観との内面的エートスの二重性

を主張しており、石井という一人の人物のなかで「ときに両者が共存し、ときに一方の価値が他方の価値を圧倒する」（本文より）ダイナミズムを、石井の実践に認めようとした。しかしながら、そもそも医学教育を全うすることは世俗的で実業教育的価値観の枠組でしか捉えられないことなのだろうか。宣教医ペリーの例を挙げるまでもなく、医療（とりわけ貧民医療）と孤児救済はキリスト教を基盤とした実利的な救済活動としての構造を同じようにもち得る。医学生石井が渡辺亀吉の妻の手術に立ち会う経験を得たのも、石井が医療という実業の側の人間であったことに基因する。医療と信仰の併存は、矛盾しないのではなかろうか。医書焼き捨てるエピソードは、石井理解において常識化している観があるが、そこに二者択一の要素を見るとするならば、医学生としての学業と孤児救済事業という方法論の間での選択であって、いかなる形態であるにせよ医療と信仰とが天秤にかけられたのではあるまい。だとすると、まだ信仰を持たない医学生石井の志学を単に世俗の実利的な論理からだけ説明することには、従来の読み取りに対するのと同様にいまひとつの物足りなさが残る。

本書の構成に反して話題が前後してしまうが、本書が岡山孤児院における孤児救済事業を棄児養育米給与方と関連付ける「社会的文脈における」検討の視点は興味深い。石井が、近世から近代への過渡期に生きたことに改めて気づかされ、本書でも紹介されている吉田久一先生の石井評「典型的明治人であった」の意味するところを味わいなおすことにもなる。明治の初めより変わらずに存在し続ける棄児養育米給与方の制度を、石井が、施設運営についてはごく限定的な利用しかなさず、しかしながらその後の里預けの展開とともに事業の中に組み込んでいったことは、石井が、社会制度を自らのニー

ズに併せて主体的に（いわば、非常に現代的に）利用している点で、そのこと自体が興味深い。さらに著者は、岡山孤児院が担った里預け事業を日誌や岡山県の社会事業史に関する文献等から整理したうえで、「近世的な棄児養育米制度を近代的に再編した」と、大胆で踏み込んだ見方を提示している。実証する社会事業史研究に止まらず、著者なりの価値志向性をもって過去を読み解いていく著者の意欲的な研究姿勢といえよう。

著者の読み解きの関心に応えるに相応しく、岡山孤児院を舞台とした石井十次の仕事は随分な広がりをもっている。本書が明らかにしているところによれば、偶発的な展開もあるようだし、石井のフットワークの良さゆえに得られた面もあるようである。その中に、渡辺亀吉を軸とした出獄人保護事業との関連があり、里預児事業と東北凶作地貧孤児救済の課題がある。

先にあげた「典型的明治人であった」という評の示すところが改めて確認されるのが、監獄改良事業、出獄人保護事業と岡山孤児院との関係性であろう。明治期の救済保護事業を特色付けるものとして、監獄問題への取り組みは看過し得ない。いわゆる監獄改良事業の鍵人物である原胤昭と原の実践を象徴する渡辺亀吉が、岡山孤児院と絡み合い、岡山孤児院の歴史のある側面で大きな役割を担っていたことを、本書は興味深く解き明かしている。読者は、石井の関心や実践が貧孤児救済事業を核としてはいるものの、それに限定されていたのではないこと、言葉をかえれば、岡山孤児院は貧孤児救済施設でありながら、純粋に貧孤児救済問題だけに向き合っていたわけではないことに気付かされるのである。考えてみれば当然であるが、石井は、その時代の空気を吸い、その時代の救済保護事業のもつ方向性のなかに生き、同時代の人々と共に社会問題の刺激を受けながら日々を送って

いたはずである。時代の呼び声が石井を監獄問題に無関心ではおかなかっただろうし、当然ながら、何らかの接点をもてばそれがまた主たる仕事にも影響するものである。このような時代との接点を、著者は丁寧に掘り起こしている。石井十次と岡山孤児院を中心点として描く広範な多領域の出来事を詳細に埋めていくことで、モザイク文様の中から石井十次と岡山孤児院を浮上させようとした著者の意図は、従来の岡山孤児院研究には見られなかったものだろう。

今ひとつの時代とのダイナミックな交流点だが、東北大凶作から飢饉を招いた1906年以降の岡山孤児院における大規模な救済実践である。このときの貧孤児救済は、凶作地に児童を収容保護できる既存のみるべき施設がなかったこともあり、東北育児院（後の仙台基督教育院、今日の仙台キリスト教育院）の新設が進められる一方で、全国の施設に被災児童を送る方法が取られた。『仙台基督教育院八十八年史』（仙台基督教育院八十八年史編纂委員会、社会福祉法人仙台基督教育院発行、1994年、35頁）には、「救済施設の収容活動一覧」が掲げられているが、それによれば、凶作地である東北三県（岩手、宮城、福島）の子ども達を引き受けた施設・団体は、岡山孤児院と東北育児院をいれて41箇所を数える。収容児童の総数は2100人程度だったという。岡山孤児院が6回にわたり825人（本書による、『仙台基督教育院八十八年史』によれば829名）を受け入れたことは、人数が群を抜いて多いことばかりでなく、受け入れ途中に原胤昭が関わっていること、宮城の地方紙である河北新報が写真入りで取り上げたこと等、注目を集めた。東北地方ばかりでなく当時の社会に岡山孤児院を印象付けた出来事であったと考えられるが、東北地方の被災児童を多人数受け入れたことが、岡山孤児院の運営に与えた影響、殊に里預児事業の展開と大き

く関連づいた岡山孤児院の論理から捉えた意味については、本書で新たに明かされることになった。

それまで自明と思われていたある側面からの理解に、視点を変えることで生まれた別の理解が加わる時、「石井十次と岡山孤児院」のような幾層もの事象が絡み合って成立している対象への関わりとしては、一歩先に進めた実感を生む。そうした研究する醍醐味を、これらの章から私たち読者は受け取ることができよう。

一方で、これまでにみてきたような本書ならではの着眼点の新しさにひきつけられたからこそ、なおさら残念なのは、「独自の視点」の一つとして挙げられていた「国際的な脈絡」における検討についてである。「国際的な脈絡」という場合、石井という人物が、あるいは石井の事業が国際社会のダイナミズムと連動したなかに存在したことが説明される分析を期待する。石井が諸外国の先人の思想や実践理論に触れ、どのように影響されたかの整理は、すでに多くの先行研究がある。また、諸外国の先行事業と石井の事業の比較は、国際的な脈絡における検討にあたるまい。筆者の読みの浅さであるのか、この点については期待された論理展開は読み取れなかった。

さて、こうして著者のガイドを受けながら、石井十次と岡山孤児院の一連の歴史をたどり、著者の視点の主張の強さに引き込まれる頼もしさを感じる一方で、いま少し対象の声をそのまま聴いてみたいという不満も感じるようになった。例えば、当初から児童の教育への関心を強くしていた岡山孤児院の教育実践は、朝晩学校、孤児教育会、地域の尋常小学校への通学、院内教育の一部再開、との経過をたどる。目次でその確認をした際に一読者である筆者が関心を持ったのは、そこで孤児院の子どもが受ける教育とそれに付随する営みの変化である。学校へ

通う年齢の子どもにとって、学校へ出かけていく（か、行かないか）ということ、学校で過ごす時間とそこでの過ごし方（教育課程の内容や時間割）、学校へ持っていく物、学校で一緒に過ごす人（学童と教師など）などは重大関心ではなかろうか、と思われる。子どもの暮らす岡山孤児院を主題としているのであれば、「子どもにとっての」価値分析がなされても面白い。例えば聞き取り調査のような当事者研究でなくとも、施設資料から対象者の視点にたった整理を行うことは可能である。しかしながら、本書は、そうした視点からの論述とは無縁である。著者の関心は、石井十次の側からの岡山孤児院の運営にあったのであり、岡山孤児院の在り様そのものではなかった、ということであろう。運営者石井十次の背後に立って、石井十次の人物像ごと岡山孤児院を眺める著者の分析をたどりながら、岡山孤児院は「石井十次によって運営された」施設だということに著者の認識があるのではないかと気付かされた。それも一つの見方であろうし、そこでの生活者を施設の主体とする見方もあろうし、あるいは、岡山孤児院を

貧孤児救済の実践事業の舞台として救済事業を主体としてみる見方もあるだろう。

本書を通しての発見は、石井十次が従来の一般的な理解とそこから形成されるイメージに反して、岡山孤児院から心理的にも距離をもち、岡山孤児院の実践のみからでは石井のごく限られた一面しか語れないほど石井の活動や言論は幅広く展開した、という事実である。このことを、本書は、石井自身と彼の周囲の多岐にわたる人材との関わりが生んだ豊富な資料を提示しながら、解き明かしている。そこには、石井を接点とはしているものの、必ずしも岡山孤児院を接点として有しない交友関係も含まれる。それが石井の人生の実証であり、本書は、その実証主義的態度を超えた読み取りの試みである。その表題として「石井十次と岡山孤児院」は適切だろうか。読破して後に残された不思議である。（細井勇著『石井十次と岡山孤児院—近代日本と慈善事業—』ミネルヴァ書房、2009年7月刊、x+531頁+6頁、価格8,000円+税）

（たざわ・かおる 聖学院大学人間福祉学部  
准教授）